

**人権講演会「人生が一番じゃなくていい～生まれてきてくれてありがとう」**



今年度の新居浜市主催人権講演会が、元オリンピック選手で現熊本市市議会議員の松野明美さんを講師に迎えて12月18日(日)文化センター中ホールで開催された。寒い冬日にもかかわらず、会場はほぼ満席の状態であった。知名度の高さはもとより演題に関心をもち参加された人が多かったのではないだろうか。

講演に先立ち市長から、人権問題に強い関心を持って来られた皆さんへの

お礼とともに、障がいのある子をもつ松野さんの貴重なお話をしっかりと受け止めた旨の挨拶があった。実は、挨拶の冒頭、「先ほど新居浜市民にとってのビッグニュースが飛び込んできたところです。新居浜東中学校の女子駅伝チームが全国大会で見事『優勝』しました。皆さんとともに喜びたい。奇しくも本日の講師は日本を代表する長距離走者の松野明美さんです」。喜びにあふれた会場の雰囲気は冷めやらぬ中で講演がはじまった。

松野さんの話は自らの幼少期の思い出から始まった。おとなしい性格で、いじめられっ子だった。駆け足も遅くて、苦勞して育ててくれている両親を喜ばせることもなかった。ところが小学5年生のとき出場した町内陸上大会で優勝してしまった。その時の両親の笑顔がほんとうにうれしかった。一番になれば、両親を笑顔にさせることができる。これがマラソンを始めるきっかけになり、「一番をめざす人生の始まり」となった。高校卒業後、社員となったニコニコ堂から出場した1987年の実業団駅伝大会で12人をごぼう抜きにし、一躍注目のランナーとなった。その後の陸上選手生活では、常に一番になるために人の2倍3倍の練習を重ね、それでも結果が出なければ4倍の練習をする。それはすべて「2番はビリと同じ、一番でなくては価値がない」との信念からだ。そのすさまじい練習は、数々の輝かしい記録を打ち立てることとなった。引退後、結婚し子どもに恵まれた。長男が



生まれ、翌年、次男健太郎くんを授かった。健太郎くんは、ダウン症という障がいをもって生まれたのだった。「なんで障がいのある子が自分を親と選んで生まれてきたのか。」今までの明るく快活な自分のイメージが崩れることを恐れて、障がいのある健太郎くんの存在を隠し通そうと決心する。しかし、日々成長する健太郎くんの笑顔が少しずつ彼女の心に変化をもたらした。彼女は、健太郎くんの子育てを通じて「人生は人との競争じゃない。一番じゃなくてもいい。」ということに気づかされる。今は、「生まれてきてくれてありがとう」と心の底から感謝しているという。心揺り動かされる感動の涙とともに、満場の拍手で講演は終わった。

**人権啓発劇『おばあちゃん、いなんといて』**

～ けいこ場を訪ねて～

「2011年度差別をなくする市民の集い～ハートFULL新居浜～」の人権啓発劇は、2月11日(土、建国記念の日)に新居浜市の文化センターで上演される予定。この人権啓発劇は脚本 松本昌士、演出 田邊健司、劇団笑夢の協力で準備が進められているが、1月の初め武徳殿西隣の文化振興会館3階に設けられたけいこ場を訪ねてみた。

夕刻6時を過ぎるころ関係者が集まり始め、「おはようございます!」と演劇関係者特有の挨拶をしながらけいこ場にはいってくる。多くの大人にまじってリラックスした服装の小・中学生や学校帰りなのか制服姿の高校生もいる。大人のメンバーはすぐに各自で発声練習や軽い柔軟体操をはじめ。やがて一声掛かって、一同車座になる。そして各自が氏名と役名を述べて自己紹介。松本昌士さんから「では、第三景の練習に入ります。」

裏面へ続く



瀬戸会館だより  
平成24年2月号  
新居浜市瀬戸会館  
〒792-0821  
新居浜市瀬戸町7-30  
E-mail  
seto@city.niihama.ehime.jp  
Tel 0897-41-5859  
(FAX 兼用)

2月公演

回転木馬

おはなし会

2月1日予定

10:40~11:00

瀬戸児童館



**「人権のつどい日」にひろう**

1月11日(水)は新居浜商業高校教諭の真鍋康憲さんから同校が取り組んでいる人権学習のようすを伺った。話は、ベートーベンの交響曲「第九」を聴くことから始まった。それは、詩人シラーが書いた「第九」の歌詞が、「すべての人が平和に生きていける差別のない世の中」を願って訴える内容だったからだ。

同校は人権・同和教育ホームルーム活動、人権委員会活動、年間7回実施される「人権day」などに取り組み、それらの成果を報告する人権・同和教育だより『ほのぼの』ほか、多くの資料が同校の実践を物語る。「高校生にも出来ることがあるとわかったので、間違っていることは間違っているとしっかり言えるようにしたいと思いません。」との感想文もそのひとつ。次代を背負う若者が育っている。

**2月の主な行事予定**

1・15・29日(水) — 移動図書館(14:00~14:40)

11日(土) — 人権のつどい日 差別をなくする市民の集い  
ハートFULL新居浜 人権劇『おばあちゃん、いなんといて』

月1回木曜日 — だまえおはなし会(15:30~16:00)



## 人権あらかると

### 「起こす」ことは通過点

川口 泰司

先日、ある部落の保護者会に参加して、あらためて社会的立場の自覚について考えさせられた。多くの保護者が、わが子に、いつ立場を伝えようか。どう伝えたらいいのかわからない。「知らなくてもいい」という思いと、いつかは「言わなければ」との狭間で悩んでいた。厳しい差別の現実があるからこそ、簡単に子どもに話せないという気持ちはよく分かる。「いつ」「どう起こすか」も大事だけど、「起こしたあと」にどうするかの方が、ボクはもっと大事だと思っている。

ボクもそうだったが、いまの子どもたちの多くは、かつてのように露骨な差別と偏見の中を生きていない。親が自分の被差別体験を語り、立場を伝えても、ピンとこない子どもたちも多い。だったら、最初はあまり構えず、「あんたは部落出身なんよ。これから部落について勉強していこうね」という感じで伝えても、大丈夫じゃないだろうか。

そして、自分の立場を自覚したうえで、学校の人権学習を受ける、地域の解放子ども会に参加する。そうすれば「自分の問題」として考えはじめ、部落出身者としての自分と向き合いはじめる。そのときに、親や先生たちは子どもの不安や揺れ、葛藤と一緒に寄り添ってあげたい。最初はマイナスで捉えていても、そのあと、何度でも部落とのプラスの「出会い直し」の場を用意したい。そうやって部落出身者としての肯定的なアイデンティティを確立させていくことが大事だと思う。

いまは、「起こせない」ままに、学校を卒業し、部落を離れていく青年たちが多いのが現実。大人になり、世間の部落にたいする差別意識を飲み込んでから、立場を知れば、それこそ余計にショックも大きい。しかも、そのときに相談する相手もない。そういう意味では、「起こす」ことは通過点で、「起こした後をどうするか」ということにも、もう少し力を入れませんか？ (山口県人権啓発センター) 『解放新聞』(2009年7月13日『マチからムラから』)より



と声がかかり、次いで「第三景に登場しない人は、ほかの人が演ずる状況を見て、観客の立場に立って演技を見てください。」と指示を出す。いよいよ練習開始。まだ手に台本は持っているが、動きを入れた練習に熱が入る。周りでそれを見ている演劇仲間は、食い入るように演技者の動きを追う。何度も何度も同じ場面を繰り返すが、その都度「おねがいしま〜す！」の掛け声で練習が始まる。

時計が8時を示すと、第三景の練習は終了。この場面は6人の小学生役も登場するので、早く帰宅させる配慮と思われる。めいめいが「おつかれでした！」の大きな声を残して子どもたちはけいこ場を後にした。

このあと第四景、大人たちが練習に入る。演技の場面、場面で演出の田邊健司さんから声が飛び、だんだんと緊張が高まっていく。この会場のほか口屋跡公民館での練習もあり、公演を支える皆さんは、日一日と舞台づくりに熱がこもる。2月11日の本番がとても楽しみである。

### ～大島とうどまつり～

### 絆を支える伝統行事

古来より綿々と受け継がれてきた島の正月の行事、新居浜大島の“とうどまつり”が、今年も、島を訪れる多くの観光客が見守るなかで行われた。

“とうどまつり”の2日前、“とうど”の組み立ての様子を見学した。この地区では、朝早くから老若男女40名あまりの

人たちが出て前日までに切り出した竹や笹を段取り良く組み上げていく。若者が年長者とともに作業にわり指示を受けながらテキパキと動いている様子には、地域で育まれた強くて温かい確かな“絆”が感じられる。1月9日当日、夜明け前の午前6時、島内各自治会の5基の“とうど”が次々と点火される。



この日は、近年にない無風の穏やかな朝。炎は風に煽られることもなく“とうど”全体を包み込み一気に燃え上がった。炎は笹の斜面を駆け上がり一層火勢を増す。夜明けを待つ島の静けさを一挙に打ち消して、竹の割れる音、笹のはじける音がすさまじい。

みるみる“とうど”の頂に立つ大幟まで炎が駆け上がり、夜空を焦がし天を突くような巨大な火柱となった。まさに昇り龍のごとく、火の粉の帯がうねりながら人々の願いを乗せて天高く舞い上がった。

凍てつく寒さの中で始まった新居浜大島での“とうどまつり”。島の伝統を支える人々の営みには、燃え上がる“とうど”の火照り以上に温かい人々の絆とぬくもりを感じるものであった。

